

# 子ども向け造形ワークショップの実践

株田 昌彦

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日



# 子ども向け造形ワークショップの実践<sup>†</sup>

株田 昌彦\*

宇都宮大学共同教育学部\*

子ども向けの造形ワークショップは、主に夏休みや休日に美術館や博物館等で行われ、子どもの造形に対する興味をより一層高めたり、同時開催中の展覧会への関心を深めたりする意図がある。本稿は筆者が企画しファシリテーターとして実践した二つの子ども向け造形ワークショップに焦点を当て、その成果を検証するものである。特に造形活動に用いる素材や場の設定の視点を重視した。

キーワード：造形ワークショップ、素材、場の設定、ファシリテーター

## 1. はじめに

ワークショップは造形の枠に留まらず、現在では企業研修や環境教育、まちづくりにおいても導入されている。中野民雄氏は著書の中でワークショップを「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びのスタイル」と述べている。ここからも造形活動はワークショップと親和性が高いことが分かる。

造形ワークショップの最大の利点として、制作時間を長く設定できる点が挙げられる。学校教育での図工や美術では、カリキュラムによって活動時間が40分に満たない場合も多く見られる。素材に触れ、考えを巡らせ、形にしていくには、ある程度の時間が必要である。限られた活動時間は図工・美術の題材設定の足枷となっている。ワークショップは、長時間の活動が可能であり、腰を据えてテーマに取り組む事で様々な発想が生まれやすいといえる。

本稿で紹介するワークショップの内容については、筆者の専門分野と対応させ絵を描く活動に主眼を置いた。同時に、単に絵を描くだけではなく、参加者同士の作品を併置し一つの大きな作品を構成す

ような手法を取り入れた。それにより、個々の作品を部分として捉える視点と、組み合わせられた作品の大きな構成を捉えるための俯瞰的な視点について子どもが気付くことを意図した。また、これら造形ワークショップを通して、設定されたテーマに関する考え方や見方が深まることも目的とした。

## 2. 事例1『わたしの夢のまち、広がるみんなのまち』 (1) ワークショップの概要

2017年8月に栃木県立美術館集会室にて実践したワークショップである【表1】。この活動を考案する際にヒントとなったのは、コンタクトゲームと呼ばれるドイツのボードゲームである。コンタクトゲームは建物や道、川といった町を構成する多数の正方形のカードを並べて遊ぶゲームである。カードの並べ方によって様々な風景が展開し、その過程を楽しむのもこのゲームの魅力の一つである。

### ■『わたしの夢のまち、広がるみんなのまち』

|             |                       |
|-------------|-----------------------|
| 会場          | 栃木県立美術館集会室            |
| 定員          | 20名(事前予約制)            |
| 対象          | 小学生以上                 |
| 持ち物         | 新聞紙、チラシなど(コラージュに使用)   |
| 開催日         | 2017年8月26日(土) 13時~16時 |
| 【当日のスケジュール】 |                       |
| 講師自己紹介      | …13時30分~13時35分        |
| 制作についての説明   | …13時35分~13時45分        |
| 制作活動        | …13時45分~15時20分        |
| まちの組み立て     | …15時20分~15時40分        |
| 写真撮影        | …15時40分~15時45分        |
| 後片付け        | …15時45分~16時           |

【表1】事例1の活動内容

<sup>†</sup> Masahiko KABUTA\*: Practice of Art Workshop for Children

Keywords: Art Workshop, Material, Structure of Place, Facilitator

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

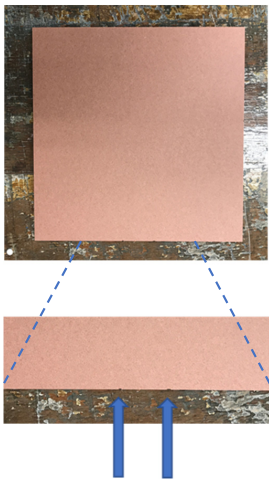
(連絡先: mkabutal@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

ワークショップでは、これらの一つ一つのカードを自ら描き、並べることを活動に取り入れることとした。また、町を描く活動を通して、造形のみならず自身の住んでいる環境にも改めて注目し、関心を高めることがテーマ設定の理由である。参加者の対象は小学生以上に設定し、未就学児については保護者同伴とした。当日の参加者は17名（保護者含む）であった。

## (2) 素材の選定と活動のながれ

絵を描く支持体は最後に並べることを考慮すると、反りの少ない厚手のものが好ましい。また、余白の部分が塗り残しとして見えにくい褐色が適当であると判断した。そのため、褐色の1mm厚のA4イラストレーションボードを支持体として採用し、短辺の長さに合わせて正方形にカットした。実際のコンタクトゲームの一枚のカードは一辺が5cmであるが、このサイズでは繊細な描画が必要となるため、このワークショップでは、21cm四方の正方形が適切であると判断した。また、定員20名で募集を行ったため、一人当たり最大5枚のボードを制作することを想定し、延べ100枚のボードを準備した。

また、ボードを並べ、うまく繋げるためには共通の要素が必要となる。今回は「町」をテーマとしたため、「道」に焦点を絞った。そのため、「道」の部分はグレーのキャンソン紙を同じ幅で短冊状に切ったものを予め準備し、それをボードに貼ることで、道を表現する手法を採った。並べる際にズレが生じないようにボードの各辺には基準点を付けておいた【図1】。



【図1】正方形に加工したイラストボードと基準点

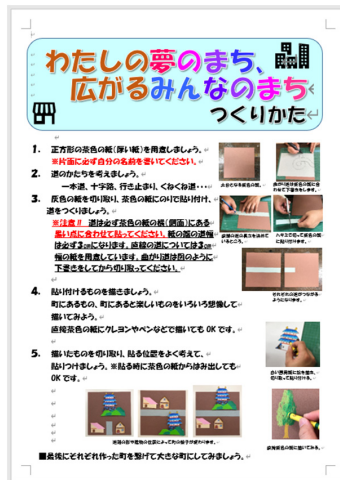
描画材については、速やかに複数のボードを描く事を考慮し、マーカーやクレヨン、鉛筆など、扱いが簡易なものを準備した。

実際の活動のながれは以下の通りである。①ボードにキャンソン紙の道のパーツを貼り付ける。②自分の思い描く町を構成する建物や樹木や川などを描き足していく。これらの町の構成物の描画については、直接ボードに描く方法や別の白い画用紙に描いた物を切り抜いて貼り付ける方法、また新聞紙やチラシの写真をカラーゼユする方法などを示した。当日は【図2】のような制作手順をまとめた資料を配布し、冒頭に説明した。③描画がある程度終了した後、ボードを共通のスペースに持ち寄り、お互いの作品を並べて一つの町を作る。このように各々のボードを制作する時間とそれを並べる時間を分けた活動とした。

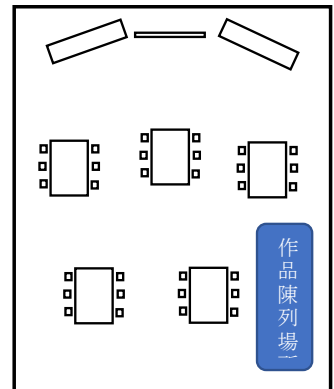
## (3) 実践結果

ワークショップ当日は【図3】のような座席を配置し、家族毎に作業できるようにした。会場の前面には説明用のホワイトボードと素材置き場を設置した。冒頭の説明では、自分の家の周りにあるものをイメージして、発想のヒントとなるよう促した。実際の制作活動では、各参加者は1枚のボードを仕上げることに集中していたため、95分間の制作時間ではならず、カードを並べる時間を短縮して対応することとなった【図4】。

そのため、予想していた作品数には至らなかった。最後のボードを並べる活動については、組み合わせによる作品の見え方の変化に参加者たちは興味を



【図2】事例1の配布資料



【図3】事例1の場の設定

持って活動する様子が確認できた【図5】。

当初80枚程度の作品を想定していたが、結果として並べられたのは66枚であった。このうち、10枚は筆者およびアシスタントが制作したものであるため、1人当たり約3枚の制作数に留まった。この原因として、前述のように1枚の制作時間が費やされたことに加え、保護者が子どもの制作の補助に徹していたことが挙げられる。制作活動の時間の途中で筆者は作品を陳列する場所に先行してボードを並べ、完成した作品から順次並べても良いことを告げ、参加者の意識を複数の制作に向かうよう配慮したが、思うような効果は得られなかった。そこで、このワークショップの反省として、場の設定の改善が浮き彫りとなった。例えば【図6】のように中央に陳列スペースを設定し、制作活動を行いつつ作品を並べることも同時に意識させるような方法に至った。

### 3. 事例2『私たちの道祖神をつくろう』

#### (1) ワークショップの概要

2021年11月に鹿沼市で開催されたAWANO夢咲くART FESTIVALのイベントの一環として行った【表2】。同様のテーマで彫刻の3分野(石彫、木彫、粘土)のコーナーが設けられ、筆者は絵画としてのワークショップを担った。ただ道祖神を描くだけではなく、それが設置されている環境をイメージしながら活動できる方法を考案した。具体的には、紙に描いた道祖神を切り取り、ジオラマのような土台に設置していく活動である。その他、道祖神以外

のものも併せて制作し、一つの風景を作り出す活動とした。参加者の公募は行わず、指定の小学2年生1名、小学3年生5名のみで、保護者の参加は無かった。

#### (2) 素材の選定と活動のながれ

このワークショップでは、描いた物を固定する術として、柔らかい土台に突き刺す方法を採用した。そのための土台の素材として、住宅用の断熱材を採用した。この断熱材は水色であったため、周囲を板段ボールでカバーした。これは事例1と同様、中間色で色の主張が少ない褐色の効果を取り入れている。縦90センチ横90センチ厚み3センチほどのこの土台を三つ用意した。そのうち一つは膨らみをもたせ起伏のあるものとした。また、突き刺すための素材としては竹串を用いた。

描画材については、事例1と同様マーカーとクレヨンと鉛筆を、支持体は画用紙に加え、ボール紙を用意した。ボール紙は画用紙よりも厚みがあり大きめの立体工作に適している。

具体的な制作活動の流れは以下のとおりである。  
①画用紙やボール紙に道祖神を描く②道祖神を切り抜く③切り抜いた紙の裏に竹串をテープで固定土台に突き刺し固定する。また、この段ボールの土台の他、制作活動時に道祖神の置かれた周囲の風景をイメージしやすくするため、板段ボールに背景画を描いた。

#### (3) 実践結果

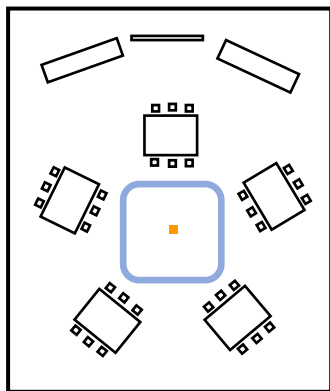
事例1の反省を踏まえ、制作しながらイメージが広がるような場の設定を考案した【図7】。参加者



【図4】活動の様子（描画）



【図5】活動の様子（陳列）



【図6】事例1の場の修正案

| ■『私たちの道祖神をつくろう』 |                              |
|-----------------|------------------------------|
| 会場              | 旧栗野中学校                       |
| 対象              | 栗野小学校3年生児童5名<br>市貝小学校1年生児童1名 |
| 開催日             | 2021年11月14日(日)11時～14時        |
| 【当日のスケジュール】     |                              |
| 講師自己紹介          | …11時～11時5分                   |
| 制作についての説明       | …11時5分～11時15分                |
| 制作活動            | …11時15分～12時                  |
| 昼食              | …12時～12時30分                  |
| 制作活動            | …12時30分～13時45分               |
| 写真撮影            | …13時45分～13時50分               |
| 後片付け            | …13時50分～14時                  |

【表2】事例2の活動内容

は描いた物を設置する段ボールの土台や背景画を見ながら作業機で絵を描くことができる。

実際の活動では、冒頭で道祖神の説明を行い、道祖神とそれが置かれる町をつくることを伝えた。次に事前に制作しておいた作例の設置を実演した。この段ボールの土台へ描いた物を突き刺す方法に加え、背景画にも描いた物を両面テープで貼りつけても良いことも示した。三つに分かれている土台については、参加者の話し合いで山なりのパーツを真ん中に配置することを決定した。

始めは戸惑いながら活動していた参加者も描いた物を設置するにつれて、次第に多様な発想を展開させた。土台の間に隙間をつくり川に見立てたり、竹串を並べて突き刺して柵をつくったりすることは筆者も想定していなかった。また、ゴルフ場や野生の鹿や蛇を描いたりして、自分の住んでいる町や自身の経験を照らし合わせて制作する姿も確認できた【図8】。最終的には、テーマの道祖神から参加者の意識は離れてしまったが、意欲的に取り組む姿勢が見られ、当初の予定より延長して制作を行うこととなった【図9】。活動後の作品は5名の参加者の母校である栗野小学校に設置され、その後も子どもたちの手によって絵が加えられた【図10】。

#### 4. まとめ

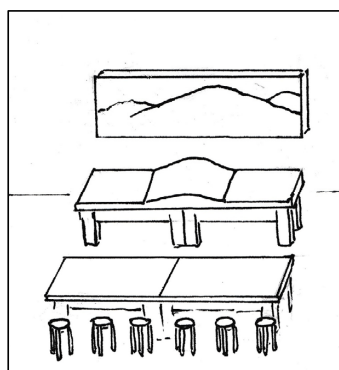
二つのワークショップの実践結果から、場の設定の重要性が認識できた。事例1では、制作時間と陳列の時間を分けたため、個々の作品の完成度は高い傾向となったが、並べて大きな町をつくる意識付けが不十分な結果に終わった。事例2では、個々の制作とそれらの設置を同時進行するよう制作の場を設定したことによって、大きな風景をつくる意識の強化と多様な発想に繋がった。

どちらの事例においても活動の開始時において参加者の取り掛かりが遅い傾向にあった。その要因として、ファシリテーターに求められるコミュニケーション力が筆者に欠けていたことは否めない。その打開策の一つとして、事前に参加者に具体的な活動内容を提示し、事前にある程度の意識付けをしておくことも考えられる。今回の結果を踏まえ、更なる造形ワークショップを考案していきたい。

#### 参考文献

- (1) 中野民夫 (2001) 『ワークショップ ―新しい学びと創造の場―』 岩波新書

令和4年4月1日 受理



【図7】事例2の場の設定



【図9】活動後の作品



【図8】活動の様子



【図10】栗野小学校で陳列された作品



# Practice of Art Workshop for Children

Masahiko KABUTA